

【月刊】キリスト教書評誌

本のひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2021年7月1日発行(毎月一回発行)第763号

July 7
2021

● 出会い・本・人

讃美歌集を編む 中山信児

● 特集「天使をめぐる物語」なら

この三冊！ 井辻朱美

● 本・批評と紹介

浅野淳博他著

ここが変わった！「聖書協会共同訳」新約編 前川裕

大野恵正著 神の言葉と契約 関根清三

佐々木栄悦著 神の恵みの水路 佐藤司郎

G・フォン・ラート著／荒井章三訳

ナチ時代に旧約聖書を読む 小友 聡

袴田康裕著 改革教会の伝統と将来 藤掛順一

中道基夫編 ペンテコステからの旅路 山本裕司

江藤直純著 ルターの心を生きる 江口再起

柳沼時影著 ヘボン先生との対話 具志堅聖

山口衣子著 私のハットフィールド 小野タキ子

ジョン・ディア著／志村 真訳 山上の説教を生きる 谷本 仰

山下壮起・二木 信編 ヒツプホップ・アナムネーシス 金 迅野

神山美奈子著 女たちの日韓キリスト教史 李 相勲

川村信三編／キリスト教史学会監修

キリシタン歴史探求の現在と未来 根占猷一

佐々木悠著 言葉を歌う 高橋正道

森田美千代著

マーティン・ルーサー・キング・ジュニア 島田由紀

村松 晋著 近代日本のキリスト者 山口陽一

100年前のパンデミック

6月10日

富坂キリスト教センター編 日本のキリスト教はス・ヘイン風邪とどう向き合ったか

各教派や学校の機関紙誌、また教界の指導的人物の日記を読み込み、当時のキリスト者がス・ペイン風邪についてどう考えていたのか、また教会としてどのような取り組みをしていたのかを探る。巻末に当時の資料からの詳細な抜粋一覧。従来の歴史の欠落を埋める共同研究。寄稿者 神田健次、戒能信生、三好千春、李元重、辻直人、熊田凡子、上中栄、堀成美ほか

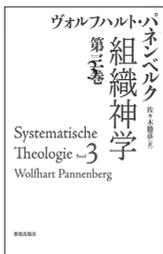
◆A5判・定価1650円

組織神学 第三卷 畢生の教会論

ヴォルフハルト・パネンベルク著／佐々木勝彦訳

終末論的な賜物としての霊に関する教理。「霊の注ぎ、神の国、そして教会」「メシアの教団と個人」「選びと歴史」「第15章 神の国における創造の完成」。第一巻は既刊。第二巻は翻訳進行中。

◆A5判・定価13200円



正教の道 キリスト教正統の信仰と生き方

主教カリストス・ウエア著／松島雄一訳

正教会の全体像を知る上で今や古典的定番となった書籍の待望の邦訳。正教の教えを簡潔に説き、古代の教父、現代の著作家、正教の祈祷文などから豊富に引用し、その霊性の広さと深さを具体的に伝える。

◆四六判・定価2530円



ジーザス・イン・デイズ・ニーランド

ポストモダンの宗教、消費主義、テクノロジ

デイヴィッド・ライアン著／大畑凜、小泉空、芳賀達彦、渡辺翔平訳

監視社会論の泰斗が、デイズ・ニーランドに象徴されるポストモダン社会における宗教の可能性を問う。

◆四六判・定価3850円

日韓キリスト教関係史資料Ⅲ

1945—2010

富坂キリスト教センター編

日韓の貴重な資料400点以上を収録。日本敗戦から日韓基本条約締結までの交流を第Ⅰ部、韓国民主化闘争と日韓連帯の動きを第Ⅱ部、戦後補償問題を含む日韓の交わりと統一への模索を第Ⅲ部とする。とりわけ民主化運動資料は他の追随を許さぬ充実。 ◆A5判・定価16500円





讃美歌集を編む

中山信児

二〇一一年九月に発行された三浦しをんの小説『舟を編む』には、国語辞典の編纂に取り組む人々の姿とその情念が描かれている。それからちょうど一年後の二〇一二年九月に『教会福音讃美歌』は発行された。私が『舟を編む』を読んだのは、『教会福音讃美歌』の編集作業をすべて終え、歌集が書店に並んだ後だった。

読みながら、辞書と讃美歌集の編纂に多くの共通点があることに気付き、感慨深いものがあつた。辞書（『舟』）が、ことばの海を渡るために有用なツールなら、讃美歌集は信仰の海を渡るために有用なツールである。辞書や讃美歌集は（希有な例外は除くとして）一人の力で書き上げられるものではない。だから編集という仕事が大切になる。編集者は、この仕事に全力を傾注しつつ、執筆者や作品を生かすために、自己表現については抑制的でなければならぬ。調査、収集の範囲は、古今東西、あらゆる時と場所に及ぶが、辞書や讃美歌集を実際に手にして

用いるのは、同時代の同国人である。だからトレンドへの目配りも求められる。

今後何十年かで、辞書や讃美歌集の形態は大きく変わるかもしれないが、それでも編纂という仕事は、地道で、根気と克己の要る仕事であることは変わらないだろう。編纂に関心のある人には、そのような現場の空気を知るために『舟を編む』を読むことを勧めたい。

讃美歌集の発行は何十年かに一度のことであり、様々な条件がかみ合わなければ、編纂の現場に遭遇することはない。私が『教会福音讃美歌』編纂に関わることができたのは、一重に神の導きと言うしかないと思っている。そして、この仕事が終われば出会えなかったであろう多くの素晴らしい方々と知り合うことができ、教えや批判を頂き、励まされ、助けられてきたことは、今の私にとって大切な財産となっている。導きの神と素晴らしい同労者たちに心から感謝したい。



「天使をめぐる物語」なら

▼この三冊！

井辻朱美

(いつじ・あけみ・白百合女子大学文学部児童文化学科教授・ファンタジー小説家・翻訳家)

R・A・マカヴォイ『ダミアーン』
『サーラ』『ラファエル』―魔法の歌
シリーズ―

『魔法の歌』三部作は十四世紀のイタリーで、天使ラファエルにリユートをならっている若者ダミアーン・デルストレীগの物語だ。

マカヴォイはまったく奇妙な味の女流作家で、出世作の『黒龍とお茶』は中国の黒龍(ウー・ロン)がメイランド・ロングと名乗る紳士となつて、アメリカに出現、元ヴァイオリニスト

予期せぬ愛が生まれるが、彼女の現在の愛人ルッジエーロと戦い、殺してしまふ羽目に。純情なダミアーンは杖を折つて魔力を捨て、ガスパールとともに楽士として行方定まらぬ旅を始める。天使ラファエルは彼に同行するうちに、「なにもものにもかかわらない、神の一部」としての聖画のような体面から逸脱し、ダミアーンを救つたり、「介入」したりはじめ、大理石像さながらの美しさにも、人間らしさがしのびこんでくる。

このあたりからマカヴォイは驚異の第三巻を意図しはじめたと思われるが、ダミアーンは「ベストをイタリーからサン・ガブリエルに持ち込んだ」とサタンに示唆され、二巻の最後では、罹患したガスパールの姉の娼婦を救うために自らを犠牲にして死んでしまう。なんと三巻では、サーラを助けにきたラファエルはルシファールの手に落

の中年女性と恋に落ちる話だった。

設定の突拍子もなさとなりを全くくだらかに現実と接続してしまう筆力、そして独特のユーモアの持ち味が、この『魔法の歌』にも生かされている。

ダミアーンはピエモンテ州のパルテストラダという街に住む魔道士で、亡き父ゆずりの魔力はあるものの音楽に心を傾け、なぜか天使のラファエルを師匠とし、教会音楽からは異端とされるであろう対位法の新たな楽曲を生み出そうとしている。

ち、人間となつてスペインのグラナダの人買いに売り渡されてしまふ。この巻では「肉体を持つ人間の営みのあれこれ」を茫然としながら幼子のように体験してゆくラファエルの運命と、彼の無垢に魅せられてかばい、世話を焼くベルベル族の女ジュウラのしたたかな愛情が読みどころだ。

しかもこんどは幽霊となつたダミアーンが逆にラファエルを勇気づけ、助ける役割に回る。純粹無染の天使であつたラファエルが言う。

「天国の音楽よりもつとまなましいのは、鼻の痛みや、したり落ちる血や、明日ウードをひかなければならないこと、便所を掘らなければならないことだ」

キリスト教の教義は奇妙な記憶として残っているが、それはもはや単なる礼法にすぎず、「アラーにはまだ紹介されていない」「アヴィニヨンの教皇

だが、うぶで純真なダミアーンの運命は歴史に翻弄されはじめる。彼の住むピエモンテ州はサヴォア軍に占拠され、住民は逃げてしまふ。ダミアーンは敵の将軍に魔道士として交渉をもちかけるが、一蹴される。愛する街と、思慕を寄せる貴族の少女のため、ダミアーンは次に「ラファエルの兄」墮天使ルシファール(サタン)に接触するが、「虚言者」は彼の甘さを軽くあしらう。

パルテストラダを後にしたダミアーンは逃げた住民らを追つて、フランスのサン・ガブリエルに向かい、途中で、すりの少年ガスパールと知り合ひ、このこすからい少年は、ダミアーンの音楽に興味を抱き、踊り手として彼についてくることになる。――物語はいったいどこへ行くのか、徐々に迷走し始める――ダミアーンは父の愛人だつたラップランド出身の魔女サーラにパルテストラダを救う助けを求め、

のことも知らない」

クライマックスでは、奴隷として去勢されそうになつた彼を助けにくるサーラ、ガスパール、そして『黒龍にお茶を』に登場する黒龍、ダミアーンの幽霊、そしてどういふわけかこのピンク色の奴隷と「恋仲」になつてしまつたジュウラが集結。

彼らの擁護を得て、サタンとの最終対決のときが訪れると、ラファエルは音楽を通じて神にいたることを語る。「おまえはわたしを知らない。だが今こそ知るだろう」

「よせ、今のはおまえではない、おまえのなかの神だ！ 余はまっぴらだ」人間としてのラファエルの死と、大天使復活のシーンは壮麗にしてまばゆい。だが、彼はもはや以前のような聖なる存在ではなく、なまなましく温かい愛を知るものとして、ジュウラとともに姿を消す。

長い物語だが、どうにもひとことではまとめられない神学譚でもある。

私はこれを訳した当人なのだが、今回三冊を読み直すのに、たいそう時間がかかった。読むにつれ、このセリフはどう苦労して訳したとか、この展開で茫然自失したとか、いったいこの人物は何を考えているのか人物像の造形をまとめるのに四苦八苦したとか、また、ラファエルの神威をあらわすのにどのくらい「盛ったらいいだろうか」と工夫した事情が逐一リアルに思い出されたからだ（私は「盛る」のが大好きである）。

天使譚という点からすれば、これはまことに希有な、他に類例のない物語かと思う。

そしてコロナ禍の現在、本書に凄惨に描写されるペスト下のイタリアやフランスの街のさまは、新たに、訳者とは別の現在の私にしてみた。

と警察に駆け込んでいたが、ようやく事件が解決し、娘に対する愛を再確認することになった。

利倉 隆 『天使の美術と物語』

『天使の美術と物語』は、ふんだんに天使の画像を見せてくれる美術史（ひいては文学史）の資料だ。画像の天使はいずれも高貴な無表情を持ち、

『魔法の歌シリーズ (全三冊)』

R・A・マカヴォイ：著／
井辻朱美：訳
ハヤカワ文庫／文庫判
『ダミアーン』1986年・
345頁・528円、『サーラ』
1987年・400頁・572円、
『ラファエル』1987年・
361頁・528円（税込）



ラファエルは大地の病を癒す天使とされているそうで、ペストの時代にはまさしくふさわしい存在なのだが、「わたしは疫病に力を持っていたら、いままでに疫病で死ぬ人間はいなかっただろう」と、ダミアーン一人をすら救えなかった（これには彼自身の望みという、やむを得ぬ事情があったが）ことを悔やむ。

天使の目線から見た人間、そして人間となった天使が体験する人間。あちこち辛辣なユーモアをちりばめながら、マカヴォイは、主人公ダミアーンを途中で離れ、「天使」という美しくも愚かしい存在に全力で取り組んだ。受肉した天使は、サタンが言うような「汚染された」ものではなかったのだと。

スザンナ・タマーロ 『トビアと天使』

『魔法の歌シリーズ』三部作にくればれば愛らしいおとぎ話である。忙し

神のメッセンジャーとしての規矩を踏み越えない。しかし目次の主題を見ると、ヤコブと天使の格闘やソドムの天使、またキリストの生涯のあちこちにあらわれる天使、聖人を守る天使など、人間とかわる側面の画題が意外に多く、マタイに靈感を与える天使（レンブラント）など近世の作品では驚くほど存在感がある。中性的であり、とき

『トビアと天使』

スザンナ・タマーロ：著
高島恵美子：訳
あすなろ書房
2000年刊
四六判 152頁
1430円（税込）



すぎる若い両親に不満を抱く少女マルティーナは、毎週訪れる祖父の存在に癒されていたが、祖父が現れなくなり、不安になって家出する。

トチノキやウサギやさまざまなものが彼女に声をかけてくる。ゲーム機の中からいきなりあらわれた『守護天使』は「だれにもひとり天使がいる」と告げ、神さまとの仲介役であることを強調する。「カードの束を持っているのは創造主で、私と君は、ただ、そのカードの中でゲームをしているだけなんだ。君が正しいカードを選んだとき、私は君に合図をする」この合図とは羽根でちよつとくすぐってくれることだ。題名の「トビア」というのは、祖父との遊びの中でマルティーナが「トビア」という子犬の役を演じ、自由にふるまい、甘えることができた思い出をさす。

祖父は交通事故で足を傷めただけで無事に孫娘と再会、両親は娘を探そう

に子どもであり、また鳥でもある天使は、よく楽器を奏でる姿で描かれる。音楽の持つ数理性と同時に、枠を乗り越えるポリフォニー（多声）の力は、天使ならではのものかもしれない。

※ご紹介の本には現在入手が難しいものも含まれ、図書館のご利用をお薦めいたします。

『天使の美術と物語』

利倉 隆：著
美術出版社
1999年刊
A5判 168頁
2420円（税込）



この訳語はなぜ変わったのか？ 聖書をより深く理解できる一冊

〈評者〉前川 裕



ここが変わった！ 「聖書協会共同訳」

新約編

浅野淳博・伊東泰泰・
須藤伊知郎・辻 学・
中野 実・廣石 望著



二〇一八年十二月に発行された『聖書 聖書協会共同訳』、皆さんはもうお持ちでしょうか。三十一年ぶりにゼ口から翻訳された！ という宣伝文句が気になりつつ、「どこが違うのかな？」と躊躇していらつしやる方も多いかもありません。また、実際に手に取られた方は、「新共同訳とどう違うのだろうか？」と戸惑われた方もかもしれません。口語訳から新共同訳に変わった時ほど見た目の変化は少ないように感じるかもしれません。そのため、「新しい聖書いいよ！」と他の方に勧めにくい……、そう思った方もあるでしょうか。

そんな皆さんに朗報です！ このたび出版された『ここが変わった！「聖書協会共同訳」新約編』は、聖書協会共同訳の意義と魅力を存分に教えてくれる一冊です。これは月刊誌『信徒の友』（日本キリスト教団出版局）の連載「新

語が載っています。これはどういうことなのだろう、と不思議に思われていた方もあることでしょう。この訳語について、本書で詳しく説明されています。「なるほど、そういうことか！」とお分かりになることでしょうか。

口語訳でお馴染みの「東方の博士たち」（マタイ二章）が復活したことに気づかれた方は多いでしょう。そもそも原語マゴスはどのように訳されてきたのか、歴史的背景を踏まえつつ、どの訳語がふさわしいのか解説されています。訳語の「美しさ」と「正確さ」は聖書においてどちらが優先されるべきか、という執筆者の問いかけは、私たちがどのように聖書を読むべきかを改めて考えさせるものです。

神学的理解の深まりを踏まえた変更として、例えばローマ書三章二五節の「贖いの座」（新共同訳「罪を償う供え

翻訳！『聖書 聖書協会共同訳』を読む」（二〇一九年度）に基づいていますが、連載分についてもさらに説明を加え、また新しい項目を加えて、連載時から二倍以上の分量になっているとのことです（四頁）。連載を楽しんでいた方にも、改めてお読みいただく価値があることでしょうか。さらに、同じく最近発刊された『聖書 新改訳2017』の本文も掲載され、比較できるのも興味深い点です。

三十一にわたる項目は、約半分が福音書、残りがそれ以外の文書から、満遍なく取り上げられています。最初は、新約聖書のまさに冒頭、マタイ一章一節「イエス・キリストの系図」についてです（一〇頁）。聖書協会共同訳でも「系図」という訳語ですが、「引照・注付き」版ではそこにaという記号が添えられています。これはなんだろうか？と読んで中を見ると、「別訳」として「創成の書」という訳

物」、同五章三〜四節の「品格」（新共同訳「練達」）があります。馴染みのある単語ほど変更し抵抗を感じるものですが、なぜ訳語が変わったのか、その背景を知ると「なるほど」と感じられるのではないのでしょうか。

本書では聖書協会共同訳における変更について、こういう点で良くなったという評価もあれば、こういう点で良くない、という批判もしています。読者はそれぞれの箇所について、自分はその立場をとるか考えることになるでしょう。まさにその時、聖書をより深く理解しているのです。聖書をさらに知りたくなる一冊、手頃な価格も魅力です。あらゆる方々にお勧めします。

（まえかわ・ゆたか 関西学院大学理学部宗教学主事）
（四六判・一二八頁・一三二〇円（税込）・日本キリスト教団出版局）

詩人が紡ぐ生きることへの 励ましに満ちたエッセイ集



目覚めていく言葉

岡野絵里子

カトリックのラジオ番組「心のともしび」で朗読放送されたエッセイを精選。詩人である著者のするどい言葉が生かす勇気を与えてくれる。
四六判・128頁・定価1540円

旧約に暗示されたキリストを説き明かす



オリゲネス サムエル記上説教

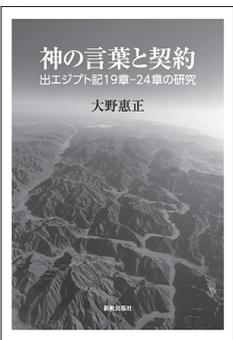
小高 毅 訳

古代教会初の教義学者オリゲネスの、サムエル記上による2つの説教と断片を完訳、詳細な背景の解説を付す。厳格な説教者オリゲネスの姿が浮かび上がる。A5判・144頁・定価2640円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp 《価格10%税込》
<https://bp-uccj.jp>

論争的分野に独自の見解を示し、
信仰的眞実に向ける

〈評者〉 関根清三



神の言葉と契約
出エジプト記19章—24章の研究
大野恵正著



四半世紀以上前、カトリックの哲学者、今道友信氏が現在の聖書学への「嫌悪」を表明し、こう書かれたことがあった。「旧約聖書の神話の核は、或る部分がどの時代に記述され、どの事件と関わるか、という文献学的推定や歴史学的指摘によって変わってはならないものなのである。事實は解明されなくてはならない。しかし、事實の次元に位置づけられたら、聖書は事實の書になるだけであって、眞実の力を喪失する。……眞実は常に事實の象徴的補完としての信仰の世界にある」(『思想』岩波書店、一九九五年九月号)、と。研究と牧会の両方に大きな足跡を残して来られた大野恵正氏の、シナイ伝承冒頭部をめぐる永年の研究の集大成となる大著『神の言葉と契約』を繙読しつつ、しばしば想起していたのは、この今道友の言葉であった。

本書が扱う出エジプト記一九章—二四章の研究は、こう

で、自ずと著者独自の視点が醸成されて来る。それも本書の魅力であり、説得力を形成する。例えば、十戒は出エジプト記二〇章版と申命記五章版のどちらが古いかという古典的問題。安息日を「心に留めよ」とし、「そして・また」と訳される接続詞ヴェエを四節と一七節で用いる前者と、「守れ」として、ヴェエを九、一四、一八、一九、二〇、二二節の七箇所で用いる後者の詳細な比較(たかがヴェエ、されどヴェエ)などを通して、大野氏は、申命記版を古いとする最近のホスフェルト、シュライナーらの説を論駁し、出エジプト記版が古いとする従来の説に与する。しかも出エジプト記版の安息日戒と敬親戒の動機付けの部分に、申命記主義者より新しい祭司資料的編集の筆跡を見出し、これを十戒成立史の最終段階を呈示するものと看做すのである。

しかも第三に、こうした成立史についての仮説で論じ止めず、その仮説に立つとどうという信仰に関わる思想が新たに現れて来るかまで、著者は論じ進む。「事実」の研究に終わらせず、「眞実」の価値への視野を開こうとするのである。その点にも本書の魅力があるに違いない。著者によれば、出エジプト記版の十戒は、祭司資料的編集者が創造論的な視点から編集を行ったものである。安息日を創造の

した歴史的事実、あるいはむしろその仮説が、諸説紛紛・議論百出した分野の一つである。そうした研究との対論に苦慮しつつ、然し敢えてそれを避けず、善くも悪しくもこの手の研究が何を論じてきたか、その見取り図を本書は与えてくれる。例えば、文書説と発展史観の基礎を築いたヴェルハウゼン(一八七六年)から、文書説を批判的に展開しながら、後にそれを解体するに至ったツェンガー(一九七一年から一九九五年)等を経て、テキストの最終形態を共時的に検討しつつ、そこから抽出される幾つもの層が編集されていく過程を想定するオズワルト(二〇一四年)に至る、詳細な研究史が批判的に辿られる。著者の長年のこの問題との誠実な取り組みに、敬意を表したい。そこに本書の魅力の一つがあるに違いない。

第二に、そうした研究史との対論の中で、悠揚迫らぬ形完成の日と位置付けることで、この編集者は出エジプトの神の救済行為を創造の秩序と結び付け、その創造の秩序の中にあるはずの人間が、そこから逸脱して殺人姦淫偷盜といった非人間化に至ることがあり得ないことを告げるといふ。

もちろん成立史の仮説を通時的に立てることをしなくても、現在我々の手元にあるテキストを共時的に読んだ時に、本質的には同様の信仰的眞実が読み取られ得ると考える向きもあるかも知れない。その点の検討は、従来の文書説の不備を様々な形で批判顛倒してきた近年の旧約聖書学の、更なる課題として残されているのだと思う。

研究史をコンパクトに纏めたシユタム・アンドリュウの名著『十戒』(新教出版社、一九七〇年)を、本書を献呈しておられる師の左近潔氏と共に訳されて学界に貢献されてきた大野氏のこの分野の研究が、ここにこのような魅力に富む大著となつて集展開されたことに、心からの敬意と謝意を表したい。

(せきね・せいぞう)東京大学名誉教授・聖学院大学特命教授
(A5判・五三二頁・六〇五〇円(税込)・新教出版社)

何よりの面白く、 ときに激しく訴えかける

〔評者〕 佐藤司郎

神の恵みの水路

現代に問いかける「ローマの信徒への手紙」
佐々木栄悦



神の恵みの水路
現代に問いかける
「ローマの信徒への手紙」
佐々木栄悦著



本書は、一口でいえば、エネルギーに溢れた聖書講話とでもいったらよいでしょうか。何より面白く、ときに激しく訴えかけ、しかも教えられるところの多い本です。

著者の佐々木栄悦牧師は、一〇年勤めたキリスト教学校の教師を今春定年でおやめになったあと、ふたたび教会の現場に戻り、現在、郷里に近い宮城県北部の教会で、牧師として働いておられます。

この本は、著者によれば、もともとキリスト教学校の高校三年生の「聖書」の時間に語られたものがベースになっており、その中のいくつかは教会でも時々語られ、練り直され、内容が整えられたものです。

最初の聞き手となった高校生は「皆素直ないい子ばかり」(六頁)だったとはいえ、ほとんどキリスト教を知らない若者たち、彼らに「福音」を語るのに、どんなにか神経を

使ったかと思えます。本書でローマの信徒への手紙全一章を一章ずつ取り上げ、テーマを一つに絞り、自由に展開するその手際は見事です。

著者は「はしがき」で特色を出そうとして心がけたことを二つあげています。一つは「説教集でもなく、講義でもなく、語りかけるようなわかりやすい言葉を使うこと」、もう一つは「東北から発信する言葉として特に東日本大震災などを常に念頭に置くこと」です。

この二つとも十分果たされています。ここで一つ一つ上げることはできませんが、ご自分の人生経験、キリスト者としての信仰の歩み、そうしたことを交えながら、いまを生きるわれわれ人間の問題が取り上げられ、それとの関連で聖書の言葉がわかりやすく解き明かされます。

心がけた二つ目のことは、本書の最大の特徴といつてよ

いものです。「東日本大震災がわたしを変えました。見た目の生活は以前とあまり変わっていないようでも、心に思うことを感じるものが変わりました。あの出来事を経験して、まるで何事もなかったように聖書を読んでいていいのだからかと自問する中から、生徒たちと一緒に聖書から学んだことをまとめたものがこの小さな本です」(六頁)。原発事故の問題(二八、一二二頁他)や大川小学校のこと(三六頁)以外にも言及された様々な問題において、時代と社会に対する著者の眼差しの厳しさだけでなく、困難と苦しみの中で、なお小さな力を持ち寄り互いに望みをもって生きようとする人々への優しさが、とても印象的です(一一六、一四七頁他)。

興味深かった比喩があります。ローマ書第一章、イス

ラエルのつまずきが異邦人への福音の道を開いたことを説明するところで、著者は、地元の迫川はまがわの上流につくられた農業用のダムのこと(軽辺川)を例に用いています。聖書をよく読み、生活やその環境のことをよく考えていなければ、こうしたつながりの発見はなかなかできないものです。最後に『神の恵みの水路』という美しい書名にも触れておきたいと思えます。著者のいうように神の義、福音という水路はわれわれのもとにすでに通っています。われわれもそのほとりに植えられて成長したい(序章、他)。そんな思いにさせる素晴らしい一冊でした。イラストも、似顔絵デッサンも、本書をよく引き立てています。

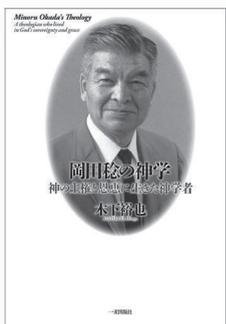
(さとう・しろう) 日本基督教団仙台北三番丁教会牧師
(B6判・一五二頁・一四三〇円(税込)・新教出版社)



岡田稔の神学

神の主権と恩恵に生きた神学者

木下裕也
KINOSHITA Hiroya



わが国における歴史的改革派神学の最も優れた紹介者であり、身をもって生き抜いた先達の神学を、綿密な解説をとおして明らかにする貴重な論考。

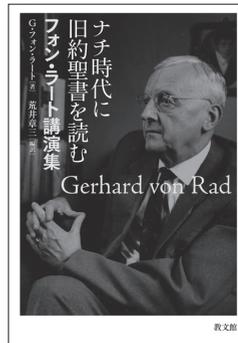
A5判
定価 6,160 [本体 5,600 +税] 円
ISBN978-4-86325-131-1



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-18
TEL (011) 578-5888
<https://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

ナチ時代を生きた旧約学者の良心的戦いを証言する貴重な書

〔評者〕 小友 聡



ナチ時代に旧約聖書を読む

フォン・ラート講演集
G・フォン・ラート著
荒井章三訳



本書は、二〇世紀最大の旧約学者ゲルハルト・フォン・ラートのナチ統治下での講演集である。フォン・ラートと

言えば、大著『旧約聖書神学Ⅰ』『旧約聖書神学Ⅱ』（以上、荒井章三訳）、『イスラエルの知恵』（勝村弘也訳）、さらに『旧約聖書の様式史的研究』（荒井章三訳）などが邦訳されている。フォン・ラートは第二次大戦中のドイツではいわゆるドイツ・キリスト者ではなく、告白教会に属する気骨の旧約学者であったことが知られている（並木浩一『ATD旧約聖書注解創世記下』解説）。このフォン・ラートが戦時中に旧約聖書をどのように語ったか、彼の肉声を伝える講演集が本書である。荒井章三先生が苦勞して収集した（未刊行のものも含む）フォン・ラートの講演原稿が丁寧に翻訳され、また荒井先生御自身による解説文も加えられている。ナチ時代を生きた旧約学者の良心的戦いを証言す

る貴重な本である。

本書に収録されている講演は一九三四年から一九三九年にかけてのもので、「アブラハム・イサク・ヤコブの神」、「旧約聖書——ドイツの人々に対する神の言葉」、「旧約聖書が持つ不変的な意義」、「旧約聖書における生と死についての信仰証言」、「旧約聖書における聖書解釈の諸問題」、「なぜ教会は旧約聖書を教えるのか」、以上六つの講演の他、付録として「旧約聖書を通してのキリスト教入門」が収められている。一九三四—三九年と言えば、まさにナチによるユダヤ人排斥の時代であり、ドイツの諸教会では「旧約聖書」はユダヤ民族の聖典として拒否される状況だった。当時、旧約学者フォン・ラートはナチの牙城と言われたイエナ大学で教鞭を執り、妨害にも臆することなく旧約聖書の重要性を語った。神学部で学ぶ学生はほんの僅かで、ヘブ

ライ語の学習すら忌避されたが、彼は真つ向からそれに異

を唱え、良心的に発言した。「信仰告白的状况」(status confessionis) に立ち、命がけて戦ったフォン・ラートの姿が本書から鮮やかに浮かび上がって来る。

戦時中のフォン・ラートと言えば、若き関根正雄氏がイエナ大学留学中にこのフォン・ラートに師事し、師がナチに抗った感銘深い思い出を書き残している（『関根正雄著作集第3巻』）。二〇世紀最大のドイツの旧約学者が戦時下の教会で旧約を旧約として説き、旧約と新約を切り離さず、旧約から福音を説いたことが本書からよくわかる。フォン・ラートは旧約学者である前に福音を説く伝道者であろうとした。そのような彼の信仰姿勢とその旧約聖書学の意図を

本書はあぶり出す。

フォン・ラートの旧約神学は旧約を宗教史としてではなく、信仰告白の証言史として救済史的に捉えた。その限界性と課題が指摘されて久しいが、フォン・ラートが方法論として用いた様式史において「生の座」Sitz im Leben という概念は、裏を返せば、彼自身のSitz im Lebenに繋がっている。本書は旧約学者フォン・ラートを紹介するだけでなく、彼の旧約神学が極めて時局に裏打ちされていたことを教えてくれる。荒井章三先生の訳業に心から感謝したい。

(おとも・さとし) 東京神学大学教授
(四六判・二〇四頁・二二一〇円(税込)・教文館)

神学ダイジェスト130号

急速な変化を遂げる現代社会。その中にある多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2021年6月発行
A5版128頁
定価640円(税込)

特集 聖書の翻訳と解釈
巻頭言 聖書 聖書協会共同訳 発行の意義
典礼が聖書解釈に及ぼす影響 W・T・テイケンズ
聖書解釈の視点としての空間性 D・カーハンズ
問テクスト解釈とは H・トウリンベ
「私たちが試みに導くことのないように」 J・グレイシム
翻訳学と解釈学 ホン・ソナム
●連載 カトリシズムと政治 H・ホーピング
●小特集 カトリシズムと政治 J・グレイシム
●新回勅「ブラテリ・トゥッテイ」の呼びかけ/良心、カトリシズム、政治/神学の座としての社会的エコロジー

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

日本伝道を切り拓く 希望がここに！

〈評者〉藤掛順一



改革教会の伝統と将来

袴田康裕著



日本において改革派長老派の伝統を受け継いでいる教会は、現在いくつかに分かれて存在している。どの教会も元々は旧「日本基督教教会」に属しており、一九四一年の日本基督教団の合同に参加していたが、戦後、「日本キリスト改革教会」(現在の名称)が一九四六年に離脱し、「日本キリスト教会」(現在の名称)が一九五一年に離脱してそれぞれ独自の教会となった。日本基督教団に留まり、教団内でその伝統を継承しようとする群れが「連合長老会」である。その他に、戦後に誕生した「日本長老教会」等もある。本書は、日本キリスト改革派教会の神学校である神戸改革派神学校の教授である著者が、これらの諸教会において最近五年間に語った講演等を集めたものであり、全体を貫いている主題は「日本における宗教改革伝統の受容と課題」である。

基本的には同じ改革派長老派の伝統を受け継いでいる教会がいくつかに分かれて存在しているのは、その伝統の何を受容し、どう継承してきたかの違いによる。それによってそれぞれの教会の特徴と課題が生じている。著者は「それぞれの教会の特徴と課題を認識し、その上で豊かな交わりを築いていければ」(あとがき)との願いをもって語っている。と同時に「自らの伝統を深く認識し、現状の課題を厳しく見極めて取り組むところから、教会の将来が開かれていくと信じています」(同)という視点から、伝道の停滞、教会の対外的ディアコニア、教会と国家、天皇制、そして「コロナ禍」という「現状の課題」を取り上げている。

著者の立ち位置はもちろん「日本キリスト改革派教会」であり、「ウェストミンスター信仰規準」によって「ある改革教会の伝統を受け継いでいる諸教会の対話と交わりのために本書の意味は大きい。この対話を深めていくことに、日本の教会の将来を開いていく希望を見ることができると思う。

なお本書の中の「キリスト者は天皇制をどうとらえるべきか」における、「私は現代という時代の認識として、キリスト教会は天皇制に対して、二度目の大敗北を喫したのだと思っています」という指摘を、我々は襟を正して聞かなければならないと思う。

(ふじかけ・じゅんいち)日本基督教団横浜指路教会牧師
(四六判・二一六頁・一九八〇円(税込)・教文館)

意味徹底的に宗教改革に遡る歴史的改革派教会を建てようとする路線」(五六頁)である。著者はそこに立ちつつ、その路線を絶対視することなく、もつと広い(曖昧な)とも言える)仕方改革教会の伝統を捉え、受け継いでいる教会にも理解を示しつつ対話しようとしている。そこで感じさせられるのは、「現状の課題を厳しく見極めて取り組むところから、教会の将来が開かれていく」という道を歩もうとする時に、信仰と教会形成における明確な規準を持つていることはやはり大きな「強み」であるということである。そこに立っているからこそ、様々な問題を教会の課題として捉え、取り組みのための教理的裏付けを示すことができるのである。

東西2人の神父が コロナ禍の教会に贈る



希望する力 コロナ時代を生きるあなたへ

晴佐久昌英
片柳弘史[著]

上智大学ソフィア会主催「Net de ASF」で「不安な時代をどう生きるか」をテーマに語った東西2人の神父による珠玉の対談に約3万字の書き下ろしを加えた現代へのメッセージ。



片柳弘史(かたやなぎひろし)
1971年埼玉生まれ。慶應義塾大学法学部法律学科卒業。94~95年、インド・コルカタでボランティア活動に従事。マザー・テレサの勤めて神父になることを決意する。08年、東京・聖イグナチオ教会にて叙階。現在は山口県宇部市で教会の神父、幼稚園講師、刑務所教諭などとして働く。

晴佐久昌英(はれさくまさひで)
1957年東京生まれ。上智大学神学部、東京カトリック神学院卒業。87年、司祭叙階。エッセイ集、詩集、絵本、日めくりカレンダー、説教集、信仰入門書等、著書多数。
現在、カトリック上野教会・浅草教会主任司祭。「福音を説明する司祭ではなく、宣言する司祭」として、プロテスタント教会やお寺、大学などで講演する。

四六判・126頁・定価1,320円+税

キリスト新聞社 since 1946
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
AVACOビル6階 TEL 03-5579-2432

多様であり、一つである
教会を表す説教集

〔評者〕 山本裕司



新版・教会暦による説教集
ペンテコステからの旅路
聖霊降臨日から教会行事暦へ
中道基夫編



本書は新版『教会暦による説教集』の第三巻にあたり、既刊一巻『クリスマスへの旅路』（二〇二〇年一〇月）、二巻『イースターへの旅路』（二〇二一年二月）に続く最終巻です。全巻、日本キリスト教団出版局「主日聖書日課」に基づく説教箇所が定められています。したがって全巻を通読することによって、旧新約聖書に貫かれる壮大な「救済史」を再体験しつつ、信仰の旅路を辿ることが出来る、そのような秀逸な企画によって生まれた説教集です。

本書はペンテコステから始まる「聖霊降臨節」から「降誕節」終末主日（アドヴェント直前）に至る説教が集められています。その内「聖霊降臨節」説教は九点が収められますが、同時にこの期節は、多くの「行事暦」が含まれるところに特徴があり、「平和聖日」「世界聖餐日」「神学校日」「宗教改革記念日」「聖徒の日」「終末主日」の説教が網羅

されています。

この書も比較的若く多様な背景をもつ十五人の牧師たちによる執筆ですが、いずれの説教も編著者、中道基夫教授（関西学院大学神学部）が指摘する通り、それぞれが直面した事柄と聖書との格闘が見られ、教義的、聖書学的な正しさを越えた、生き様を問う言葉が綴られており、大変感銘を受けました。失礼ながら以下その断片を記します。

「聖霊の風が吹き抜けていく。するとどうなるか。みんな神さまの方を向くようになります」（土肥研一牧師）。それはコロナ禍によって強要されるような「同調圧力」（草地大作牧師）とは異なると暗示されます。わたしたちは「教会への熱心さで一致しなければならぬのでしょいか。……（神は）想像以上に多様な方法を用いる」お方です（松村さおり牧師）。「むしろ正しさ、強さを求め……私たちの

『信仰』こそが『その人と最後まで共に』を生きられなくしている」（大仁田拓朗牧師）。聖霊による一致と偽りの一致の狭間で、迷いつつ「正解」なき旅を続ける私たちの教会です。しかし「インマヌエルなるイエス・キリストは、

今日も助け主なる聖霊によって、私たちをどんな時にも見放さず、……担い、父と子と聖霊の三位一体の交わり、……究極の愛の交わりの中に共におらせてくださるお方です」（朝岡勝牧師）、そう確信へと導かれます。

このように説教者たちが、ヤボクの渡りで神と夜明けまで格闘するようにして紡ぎ出した言葉に私は打たれます。それらは時に一見、互いに矛盾した言葉であるかもしれませぬ。しかし説教集全体を俯瞰すれば、どこも対立はしていない、それこそまさに聖霊の賜物である「多様であるこ

と、一つであること」、その教会の「豊かさ」がこの説教集には結実しているのです。

三輪義也氏による装丁には「炎のような舌」を冠とする十二使徒が描かれています。彼らは皆揃って一方向（神さまの方）を向き、三位一体を表す三つの「輪」の上にも、もう一つの輪を自ら作っています。それは教会の一致を表すに違いありません。それでいて、使徒たちの顔は、一つとして同じものではありません。そこに使徒たちの一致と多様性が表現されており、この説教集を見事に象徴しているのです。

（やまもと・ゆうじ）日本基督教団西片町教会牧師
（四六判・二四〇頁・一九八〇円（税込）・キリスト新聞社）

教会暦を辿る、
教会と信仰者の旅

新版
教会暦による説教集
シリーズ

Ⅰ クリスマスへの旅路
アドヴェントからエピファニーへ
越川弘英〔編〕

Ⅱ イースターへの旅路
レントからイースターへ
荒瀬牧彦〔編〕

Ⅲ ペンテコステからの旅路
聖霊降臨日から教会行事暦へ
中道基夫〔編〕

コロナ禍で紡がれた
福音を語る現代の説教

コロナ禍のクリスマスを皮切りに、気鋭の牧師・司祭の説教を通して味わう、「教会暦による説教集」の新シリーズ。日本基督教団教会暦に沿って、毎週の主日を、日本基督教団、カトリック、ルーテル、聖公会、バプテスト、福音派の若手～中堅の牧師たちの説教を通して味わう。

【第Ⅰ巻】 四六判・232頁、定価1,980円
【第Ⅱ巻】 四六判・256頁、定価1,980円
【第Ⅲ巻】 四六判・240頁、定価1,980円

キリスト新聞社 since 1946
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
AVACOビル6階 TEL 03-5579-2432

現代の私たちに ルターの真髓をわかりやすく

〈評者〉 江口再起



ルターの心を生きる
江藤直純著



充実した読後感をもって本書を閉じた。ルターを知り深く学ぶために、またとない本だと思った。すべての人に薦めたい。

ルター、ルターと言うけれど、なぜルターが大切かわかる。ルターは、ルター派だけの遺産ではない。ルターを通して、キリスト教信仰の真髓、骨太な全体がわかるのである。しかも本書は、その骨太な骨格の現代における意味、それがよくわかるのである。

内容を紹介したい。本書はともうまく構成されていて、ルター神学にとって最も大事なテーマをいくつか選び、その一つ一つのテーマに沿って、何本かの論考をまとめて配列してある。したがって、ルター神学のあるテーマについて知りたいと思ったら、その何本かの論考を読めばいい。スツキリ頭と心に入ってくる。

という視座を持ちえたからだと、本書全篇を通して江藤氏は力説する。その通りだ、と思う。

ところで、先程、本書はけっこうボリュームがあると書いたが、安心してほしい。とてもわかりやすい叙述である。術学的なところがない。恐らく多くが講演会やセミナーでの講演発題の原稿を元にしていうことであろうが、江藤氏の人柄もあらわれているのだろう。要するに明確で、しかも柔らかな言葉で綴られているので読みやすい。テーマごとにまとめられているので部分部分を事典風に読むこともできるし、また通読すればルターの全体像、いやキリスト教の真髓がわかるのである。

最後に少し個人的なことも書きたくなった。実は江藤氏と私は、熊本で育ち、小中ころから知っていたし、高校

さて、そのテーマである。以下のようなテーマ(項目)

が並んでいる。「ルターの精神」、「人間観」、「教会論」、「信徒祭司性」、「キリスト者の自由」、「礼拝論・賛美歌」、「社会倫理」、「小教理問答」、「アウグスブルク信仰告白」、「エキュメニカルな到達点」。全部で十項目。必要にして十分。

本書は全体で四一三ページ。けっこう厚い。ではポイントはどこか。私のみるところ、やはりポイントは、ルターの福音理解にあると思う。引用しよう。《∴「恵によってのみ (sola gratia)」とルターは言ったのです。その恵みを受け取るのが信仰だから「信仰を通してのみ (sola fide)」と言ったのです。》(一五頁)。であるからルター風に言えば《受動的な恵み、能動的な生き方》(四五頁)ができるのである。ここである。そして更に言えば、そうした信仰生活ができるのは、ルターが「神の前」と「人の前」

は同窓である。そして日本ルーテル神学校に入学した時、気がつけば私の横に彼がいた。というわけで、一緒にルーテル教会の教職接手を受け、そして牧師として一緒に仕事をした。教会や神学をめぐる問題で見解がいつも一致していたわけではない。論争のようなこともあったと思う。ところが本書を読んで驚いた。結局、一致していたではないか。違いなど二次的、三次的なことだ。なぜか。答えは簡単。ルター神学の基本線が共通の土台となっているからだ。いやキリスト教信仰の土台が同じなのだ。当たり前のことであった。それだけに、江藤氏が本書を出版されたことがとても嬉しい。一人でも多くの人が、本書を手に入れてくれることを願う。

(えぐち・さいき)ルーテル学院大学・神学校ルター研究所所長
(A5判・四一三頁・三三〇〇円(税込)・リットン)



実践 教会役員 マネジメントと リーダーシップ

坂本 雄三郎 著

●A5判並製 193頁
●定価1,760円(税込)

伝道に燃える教会を目指すために、40年余りの体験をもとに教会役員の働き方について信徒の目線で記した実践の記録。デルファイ法などを教会運営に適用した具体例を収録。 ISBN978-4-86376-089-9

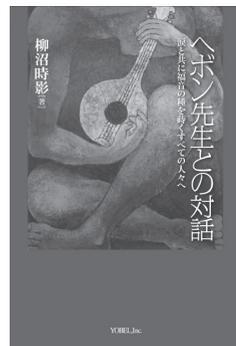
- 第1部 開拓期の南房教会にみる役員の働き
- 第2部 教会運営の基盤——マネジメントとリーダーシップ
- 第3部 これからの日本伝道

LITHON [リットン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

医療伝道宣教師へボンとの 時空を超えた対話の書

〈評者〉 具志堅聖



へボン先生との対話
涙と共に福音の種を蒔くすべて
の人々に
柳沼時影著



港町・横浜は、私が最初に派遣され、牧会伝道に関わる
こととなった街です。約十二年間、戸塚区の傍らで小さな
群れの牧師として生活しました。あれから約20年が過ぎて
しまいました。今でも時々当地を訪れては心に安らぎと
慰めを得ています。

そんな美しい街の傍らで著者の柳沼時影氏は眼科医兼牧
師として尊い働きをされています。ご自身は韓国生まれで、
キリスト教宣教の情熱を持つ人物で、医療のみならず日本
宣教の歴史を丁寧な学び続けておられる様子がよくわかり
ます。歴史好きの方なら著者のコメントの裏どりをしたい
と思うことでしょう。

私は最初『へボン先生との対話』というタイトルに正直
戸惑いを感じました。これは人物伝、それとも研究論文な
のだろうか？ 実際に読み始めると、さらに悩みは深

代背景、日本や他国の教会史に登場する人物の足跡、今日
苦難に立つ日本の教会の現状について、複眼的に解き明か
すような内容となっています。それはまた、論文調の言論
ではなく、情緒的表現を用いながら対話調で問題点を語る
物語となっています。読み終えて思ったことは、へボン先
生という歴史上の人物を用いながら、もう一人の著者自身
の声を表現する。いわゆる腹話術のような特徴を持つ対話
小説となっています。不思議な読感を味わうでしょう。

ジェームス・C・へボン博士は医療伝道宣教師で、日本
の聖書翻訳事業に大きな貢献を残された人物です。その延
長線上に私も日本聖書協会（JBS）の歴史は発足しま

くなりしました。これはどのような類型の本になるのか。証
書？ ファンタジー小説？ 自伝的物語？ あえていうな
ら、それらすべてが融合されているような書物であるとし
か表現することができません。

前書きで著者はこう言います。「私は弱くなっていく自
分をへボン先生にぶつけてみたかった。クリスチャンの世
界では自分の悩みをイエス様につける、とよく言う。私
はへボン先生を、170年前の過去から今の横浜へもう一
度招いてみることにした。伝道者へボン先生の心を頂くため
ある」と。著者と同じ眼科医でキリスト教宣教のために来
日し、その生涯をささげた偉大なる伝道者へボン博士を今
日に甦らせる試み、真に驚きです。

この対話は、開国初期の日本の様子を詳細に描くとい
うのではなく、明治期から現代に至るまでのさまざまな時
代背景、日本や他国の教会史に登場する人物の足跡、今日
苦難に立つ日本の教会の現状について、複眼的に解き明か
すような内容となっています。それはまた、論文調の言論
ではなく、情緒的表現を用いながら対話調で問題点を語る
物語となっています。読み終えて思ったことは、へボン先
生という歴史上の人物を用いながら、もう一人の著者自身
の声を表現する。いわゆる腹話術のような特徴を持つ対話
小説となっています。不思議な読感を味わうでしょう。

（四六判・三一二頁・一八七〇円（税込）・ヨベル）

ヨベルの新刊案内

青野太潮 福音の中心を求めて どう読むか、新約聖書

新書判・二四〇頁
3版出来！ 二二〇〇円



聖書学の常識は、信仰のヒジョウシキ。
この逆説と乖離の荒海を、いざ航海。
「青野先生はキリスト教の『常識』にいつも挑戦さ
れていましてね。おこなった類のことを言われるこ
とがあります。……しかしそれらららららつ聖書学
信仰の『常識』は、多くの場合、厳しく相対立し
ていますので、こはやつかいで。 (本文より)

金子晴勇 キリスト教思想史の諸時代 ヨーロッパ中世の思想家たち

反響の第三回配本



- I 『ヨーロッパ精神の源流』 (既刊)
- II 『アウグスティヌスの思想世界』 (既刊)
- III 『ヨーロッパ中世の思想家たち』
- IV 『エラスムスと教養世界』 編集者
- V 『ルターの思索』
- VI 『宗教改革と近代思想』
- VII 『現代思想との対決』

新書判・平均256頁・各巻本体1,320円
ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

清々しい印象感が残る 夫婦での留学記

〔評者〕 小野タキ子



私のハットフィールド
山口衣子著



わたしの敬愛する山口衣子先生の著書『私のハットフィールド』の書評ということですが、まことに恐れ多いことで、書評と言うことにはならないかと思いつつも先生への敬愛の思いの一端を語ればよいかなと思いつつ書かせていただきます。

海外、特にアメリカに留学（キリスト教関係）するかたがたが多い昨今ですが、今から四〇年以上も前に夫婦で、そして一歳、四歳の幼児を連れて、アメリカの神学校に留学するご主人（勝政師）と共に渡米するということは並大抵でない決心であったことと思います。しかも、神学の学びに専念するご主人を助けつつ、一家のあらゆる生活、経済的なやりくり、子供たちの育児の世話や教育、生活費を得るための日々の労働の戦い、アメリカとの生活習慣、文化の違い、言葉の壁などあらゆる孤独な戦いを戦いつつ、

のある筆致でその間の出来事が記され、時にほほえましく、また学ばされます。

しかし、以上のことと共に私の思い込みでなければ、著者を支えたのは、その題名にありますように、アメリカのペンシルベニア州にある地方都市ハットフィールドという自然豊かな町とその周辺に住む愛情にあふれたクリスチャンたちではなかったかと思われます。よく、アメリカの地方都市には古き良きアメリカが残されていると聞きますが、それ以上に、ここはピューリタン精神が色濃く残ると共に、福音主義を固守する人々のまさに「古き良きアメリカ」の地ではなかったのでしょうか。

著者はすぐこの地に溶け込み、人々に愛され、またこの地の人々を愛し、一方ならぬ祝福と恵みを与えられたこと

四年間の留学期間を勝利をもって全うできたことは驚きと
言つてよいことです。

確かに、この著書の中には、一家を支えるためのアルバイトから来る疲れ、腰痛など持病のために、いつも苦しみながら、折り求める著者の姿が描かれています。しかし、「恐れるな……あなたと共にいつもいる」（創世記二八・一五）など、折にかなって語られる主のみ言葉に常に励まされて立ち上がる著者の姿からはみじんも敗北感、挫折感を感じることが出来ません。常に信仰から来る希望に満たされて立ち上がっていますから、清々しい印象感のみが残ります。ところで、著者を支えたのは、もちろん、勉学に専念する勝政師や子供たちへの夫婦愛、家族愛があったことであり、彼らもまた、妻、母親に協力し、一心同体となって苦境を乗り越えたと推察しますし、また著者特有のユーモア

は、感謝をもってつづられたこの文章に多々見受けられることです。この地のクリスチャンたちもまた日本に戻って、異教の地でキリストの愛を伝える若き日本人の家族たちを愛情をもって迎え入れ、それにふさわしき人材として日本に送り返すことに特別な意味を感じたのではないのでしょうか。彼らにはいまだに衰えない世界伝道のスピリットが脈々と流れていることを感じさせます。

最後に著者ご夫妻がかの地で学ばれたことを基として、今もまた伝道困難と言われる茨城の地での地方伝道に長い間いそしまれ、奮闘され、多くの実を結ぶと共に、後に続く地方伝道者たちの良き証人、励ましとなれていることに深い感謝を覚えながら筆をおくことと致します。

（おの・たきこ 日本ホーリネス教団佐渡相川キリスト教会牧師
（四六判・一五二頁・一四三〇円（税込）・ヨベル）

ヨベルの新刊案内

小友聡（神学博士・宗教学士・神学博士・神学博士） 旧約聖書・「雅歌」に学ぶ

謎解きの知恵文学

渾身の書下ろし！

妖艶な「雅歌」がなぜ聖書正典に入っているのか。その不思議な謎を解き明かす！

男女間の妖艶で、エロティックな相聞歌、女性解放の書、なま別枠扱いされてきた、くだんの古典を「謎解き」をテーマとする「知恵文学」として読み直し、教会説教の主題となり得る脈脈を探る。

新書判・二二四頁・二二二〇円

村椿嘉信（ぎのわん集代表）

荒れ地に咲く花

生きることを愛すること

荒れ地に咲く花

混濁とした時代にあつて、社会のさまざまな問題と関わりながら、どのように生きるべきなのか。「知恵」には限界があり、イエスは「愛する」ことが決定的に重要な指摘した。私たちが愛することによって、荒れ地に花を咲かせることができ。 四六判・一六〇頁・一三三〇円

大反響！

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

達意の訳による 聖霊の迫りに満ちた一冊

〈評者〉谷本 仰



山上の説教を生きる
八福の教えと平和創造
ジョン・ディア著
志村 真訳



二月一日、ミャンマーで軍事クーデターが起きた。平和と民主化を求める人々が歴史的な市民的不服従運動（CDM）へと立ち上がった。軍と、その手先と化した警察はこれに容赦ない暴力で弾圧を加え、ミャンマーの人権団体「政治犯支援協会」（AAPP）によれば、五月一七日の時点ですでにこどもや医療従事者も含め八〇二名が殺害されている。

インターネットを通じて、傷つけられる人々の叫び、そしてそれでも立ち上がり続ける姿が伝わってくる。何ができるのかを問われ、無力感に苛まれる日々。

そんな中、この本を読んだ。著者ジョン・ディアはアメリカ合衆国のカトリック司祭で、平和運動家。「彼には三十年を超える非暴力と平和創造の働きがあります。反戦の市民的不服従行動によって八十回以上の逮捕歴があり、一

九九三年の『鋤武装解除行動』（空軍基地に侵入して、核ミサイル搭載可能な戦闘機をハンマーで叩くという『預言者的象徴行動』）によって八ヶ月投獄されました」（訳者あとがきより）。

本書は「心の貧しい人々は幸いである」から始まる山上の説教の冒頭の八つの祝福のひとつひとつを、イエス・キリストの平和を生きるための具体的指針として提示する。暴力に従わない信仰を实践する道を指し示すガイドブックであり、祈り、黙想、内的平和・平和的靈性に満ちた生活のための How to 本でもある。

第3章「悲しむ人々は幸いである」で著者は言う。「週に一度、あるいは毎日でもよいのですが、時間を取って、嘆き悲しむ必要があります。神と共に沈黙のうちに座し、数千の姉妹・兄妹について嘆き悲しみ、数百万もの被造物

と被造物世界そのものについて悼み、私たち共通の喪失による悼みに心を引き裂かせるのです」（五二頁）。キリスト者には悲嘆という手段がある。信じる者は悲嘆することが、できる。悲嘆はミャンマーで立ち上がり続ける人々に伴い歩む主イエスと響き合う祈りであり、非暴力で闘う人々とつながる道。そのことが示されていて励まされる。

著者がこのコロナの状況の中で関わった非暴力平和創造行動は、二〇二〇年だけで四〇五八回を数えたという（訳注38）。何もできない一年だった、などと言っている場合ではなかったのだ。

最終の第13章は圧巻。著者はイエスの祝福「幸いである」について「立ち上がって前進せよ」という訳を採用し、山上の八つの祝福に全く新しい光をあてて畳みかけ、読む者の心を燃やす。そして本書の結論は、これに基づく祈りで静かに閉じられる。豊かな礼拝に与ったような気持ちになつて、溜息と共に本を閉じた。

まるで著者本人が日本語で直接語りかけてくるように感じられるのは、志村真さんの訳に負うところ大。「のっけ

から」「ガツと反応」「自分で自分に突っ込みを入れて」など、普通の訳者なら使わないような日常的な表現が訳語として随所に散りばめられていて、うれしくなる。探してみてもほしい。

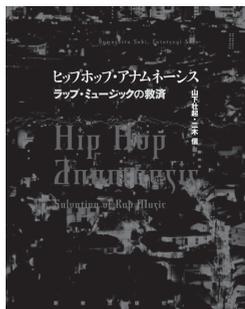
また、訳者の丁寧なリサーチに基づいて付記された訳注の数々は、読者がさらに本書の促す平和創造について深く理解し、さらにこれらを手がかりに平和に関する学びや思索を広げるのにも役立つものとなっている。

さあ、どうする。平和のための祈りを、今、字句どおりに生きるのか生きないのか。聖霊の迫りに満ちた一冊。

（たにもと・あおく）日本バプテスト連盟南小倉バプテスト教会牧師
（四六判・二一六頁・二〇九〇円（税込）・新教出版社）

ラッパーは「声」を聴く耳が 救済には必要なのだと訴える

〈評者〉金 迅野



ヒップホップ・
アナムネーシス
ラップ・ミュージックの救済
山下壮起・二木 信編



「アナムネーシス」は、聖書で、救済の根源に横たわる「過ぎ越し」の事件を胚胎しながら、十字架を「記念」するものとして使われている言葉だ。公民権運動の主体であった黒人教会がとった「リスベクタビリティ・ポリティクス」(身なりを整えて上品な言葉遣いをする)ことで、黒人は『立派な市民』であり平等に扱われるに相応しいことを示す政治的手法) (七六頁) がはじき出してしまった存在。しかし Black Lives Matter のうねりにはまだ含まれている存在。ヒップホップという運動の生成の背景と、「声」が発せられる複雑な文脈について語られているこの書物が向かうのは、そのような存在の生に触れる「声」を「記念」し想起することだろう。

第一部では、読者が、その「声」を、救いにかかわるものとして記念し、想起することを願う、五つの論考と講演・

という言葉は通常、ただ「ならず者の生」としか翻訳できないだろう。しかし、この書で一人の中心人物として紹介されている2パックというラッパーが腹に刻んだタトゥーの含意、つまり The Hate U Give Little Infant Fucks Everybody (幼子に植え付けられた憎しみが社会に牙をむく) という意味を受け取るとき、私たちは、ラッパーたちの「声」に、救済が向かう(世界)が息づいていることに気づくことになる。

ラッパーたちの「声」の強度は、聴く耳が存在することへの願望の強さを表しているのではないか、といま筆者は感じている。それは「少女、不良少年、無職の若者が誰にも見向きもされない社会の片隅のギリギリの状況下で上げた声」(七九頁)であり、「いろんな人が発信する言葉が何もかも狂ってるんじゃないかと感じてしまった」(一六二頁)果てに湧き出た声である。しかし、それは、「ほかの誰もわからなくていい、でもお前だけはわかってくれ、そうやって呼びかけるための曲が詰まってるんだ」(二二九

説教・小説が「福音」として紹介されている。筆者は、「マツチヨ」、「行儀が悪い」、「暴力的」と敬遠されることの多いラッパーたちの「声」には、たとえば一九六五年に起きたワッツ暴動のような「民衆暴力」が他者の排除へと向かう手前で持つ怒り、つまり権力や社会の構造が小さくされた個人の生全体を押しつぶす暴力への怒りが豊かに込められていることを教えられた。「声」が抱いている救いへの願いに連なるために、「声」を代弁する/再一現前させる語りは、いずれも、現に多くの人が眼差している世界とは違う(世界)に触れる眼差しの在り方を示しているように思う。そして第二部には、この地でことばを紡ぎ「声」を発してきた六人のラッパーたちの生の文脈が、丹念なインタビューによって綴られている。

私たちが世界を生きるとき、たとえば THUG LIFE (頁) という、聴く耳を持つ「他者」が存在することへの願望を表すものでもある。「声」は、時折表面に現れる排他的で暴力的な表現の深部に、「南米人は黒人、東洋人は黒人……」(三九頁) という開かれた連なりと、救いの顕れである「コモン」への方向感覚を鉱脈として有しているのであって、だからこそ「コンシャスネス+science+ness」(ともに知を深めること)の萌芽たりえているのではないだろうか。

この書は、誰かの SOS を聞き逃しながら何事もなかったかのように日常を送るあまたの私たちに、立ち止まり聴くべき「声」があること、そして主の救いが真っ先に向かっている魂の在り処と在り方について教えてくれる。稀有な形で顕れたこの書物を通して、多くの人が自らの「アナムネーシス」に出会うことを願う。

(きむ・しんや) 在日大韓基督教会横須賀教会牧師
(A5変型判・二六四頁・二七五〇円(税込)・新教出版社)

今日の日韓関係に対しても 多くの示唆を与える一冊

〈評者〉李 相勲



私たちの
日韓キリスト教史
神山美奈子著



書名に「わたちの」とあるように、本書は日韓の女性キリスト者に焦点を当て著された書である。本書は、著者の博士論文と修士論文をそれぞれ加筆した第一部と第二部の二部構成からなる。第一部「わたちの日韓キリスト教史―婦人矯風会をめぐって―」では、日韓キリスト教関係史においてこれまであまり注目されてこなかった日本の女性キリスト者の朝鮮理解について歴史学のおよび宣教学的に論じられている。一方、第二部「韓国フェミニスト神学概観―教会論を中心に―」では、日本ではまとまった形の紹介がなされてこなかった韓国のフェミニスト神学についての整理・分析がなされている。

第一部の中心的な分析対象である日本キリスト教婦人矯風会は、女性による米国発の禁酒運動が世界に広がる中、一八八六年に設立された団体である。現在も民法改正（選

択的夫婦別姓など）、女性・子どもへの暴力や日本軍「慰安婦」など戦時性暴力問題、死刑制度廃止、在日外国人の人権、エネルギー問題などの解決に向け、活動を展開している。

その矯風会は、日清戦争前後から植民地支配の終焉を迎えるまで朝鮮に対しては同情的ではあったものの支配者的な認識を持ち続けたという。植民地時代の一九二一年には朝鮮部会を設立し、一九三九年には同系統の朝鮮人女性団体の朝鮮基督教女子節制会（現・大韓節制会）を合併している。

この朝鮮部会の設立時に初代部長となったのが淵澤能恵であった。淵澤は、韓国ソウルにある淑明女子大学の前身である淑明女学校の設立（一九〇六年）と運営に携わった人物であり、朝鮮の女子教育に尽力した人物としても知

られる。本書では、その淵澤との関係を中心に、同化政策を推進した朝鮮総督府とそれに加担した日本組合基督教会がいかに同校の設立と運営に深く関わっていたのかについて明らかにしている。先行研究において評価の分かれる淵澤に対しては、「『良心的』な動機があったにせよ、…：日本の侵略行為に対する無批判的な姿勢があった」（八一頁）、「淵澤の女学校設立目的は、日本の帝国主義を拡大させるための植民地支配という大きな波の中に埋もれていた」（一五六頁）と批判的に評価している。「良心的」な動機が必ずしも他者のためとはならない、特に国家などの権力と批判的な視点なしに結びつくときには危険であるということ

は、今日に生きる私たちも歴史の教訓とすべきことであるう。

第一部ではその他にも、日本の敗戦後に矯風会から独立した大韓節制会と矯風会の活動の方向性が大きく異なっていた過程や原因など興味深い内容が多く記されている。

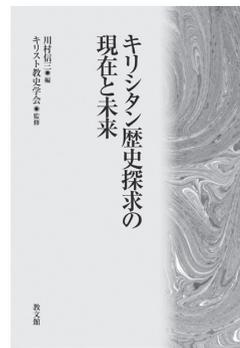
第二部では、朝鮮におけるプロテスタント宣教初期から二〇〇〇年頃までの女性キリスト者の置かれた状況・課題・活動が整理されている。特に一九七〇年代に韓国に紹介・受容され始めたフェミニスト神学については、年代別に代表的な神学者とその主張が整理・分析されており、韓国のフェミニズム神学の受容と発展について知るための良い手引きとなっている。

現在、日韓関係は停滞しているが、そのような時期にあって日韓関係を忍耐強く維持し、発展させていく上でも、本書との「対話」は多くの示唆を私たちに与えてくれることであろう。

（い・さんふん）関西学院大学専任講師
（A5判・二七二頁・四八四〇円（税込）・関西学院大学出版会）

キリシタン研究の現状を語る 示唆に富んだ論集

〈評者〉 根占 一



キリシタン歴史探求の
現在と未来
川村信三編
キリスト教史学会監修



本書は、編者川村信三の序章「キリシタン研究の過去・現在・未来」から最後の第八章森脇優紀「イエズス会宣教師と紙」まで全九章から成り立つ。各章ごとに九人の筆者がキリシタン研究の現況を語っている。いずれもこれまでの成果を踏まえながら、これを批判的に継承し今後の課題にしようとする姿勢で貫かれる学術書である。

その中で他の章に比べて異質なのは最終章であろう。和紙が世界的に名高いことは言を俟たないが、それは当該のキリシタン時代でも外国人宣教師が気づいた点であった。またそれだけではない。小著『東西ルネサンスの邂逅——南蛮と禰寝氏の歴史的世界を求めて』（一九九八年）を書くにあたって、来日外国人が当時の日本列島人が懐紙を忍ばせ、また贈り物などの際の包み紙に気を配る様子に感心するさまを知るにつけ、ティッシュペーパーと包装文化の

前史がここにはあったと思ったものである。

森脇はしかし印刷用紙などの科学的な分析を詳らかにして離日したイエズス会士がマニラで和紙を用いていることに言及し、比較文明論を超えて紙質に迫る。先駆的研究者の一人である井手勝美は、トインビーの文明論的考察に示唆されて日本人のキリスト教「受容」を問うてキリシタン思想史に取り組んだ。この受容に関して鋭い分析を行うのは第一章の東馬場郁生である。東馬場によるキリシタンの平仮名表記の意義は知られるようになっていよう。また一、二次文献の理解や翻訳に関わる見解を示す一方で、この時代研究の発信のために英語発表を勧めている。私などがこのキリシタン史に発言ができるのは研究者たちが営々と一次文献の翻訳を重ねてきたことにある、と思っている。抑々あの時代の邦人たちもまた文献翻訳に努めていた。翻訳は

解釈の試みであり、受容の在りかたに反映されている。

史料読解の重要性は日本史家の村井早苗、清水有子、大橋幸泰の第二、三、四章で端的に明らかにされ、三氏の論拠となる。ただ精神史家からは異なる文献資料の読みがあるうし、大橋の「属性」使用にはとまどいが、論旨は具体的である。村井早苗の絵踏に至る研究史は清水の禁制史とともに今後の導きとなるであろう。奇しくも両氏に「イベリア（イベリアン？）・インパクト」言及があつて興味深い。評者は自らの思想研究上、浅見雅一による良心問題、狭間芳樹による死生観、そして安廷苑による細川ガラシア考察

の第五、六、七各章には示唆を受ける点が多々あった。これらには「受容」の歴史から生まれた精神史の諸問題が看取され、さらに研究の深化が望まれる。

更に評者はルネサンスの歴史的人物たちから信心会（兄弟会、コンフラリア）と出会って興味を持った。フィレンツェのミゼリコルディアは今も活動している。川村は序章で信心会を捉えた経緯の学究体験を語っており、懐かしくこれを読むことができたと付け加えたい。

（ねじめ・けんいち 学習院女子大学名誉教授
（四六判・二二八頁・二六四〇円（税込）・教文館）



日本キリスト教歴史人名事典

鈴木範久 監修 日本キリスト教歴史大事典編集委員会 編 呈・内容見本

最新の研究成果や新事実を反映した約5150人のキリスト教関係者を網羅。日本キリスト教史研究の里程標ともいえるべき必須の基礎文献。

好評発売中

● B5判・函入・984頁・定価49,500円



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
☎03-3561-5549 FAX 03-5250-5107

グレゴリオ聖歌研究の
最先端

〈評者〉高橋正道



言葉を歌う
グレゴリオ聖歌セミオロジーと
リズム解釈
佐々木悠著



本書には、グレゴリオ聖歌とその愛好者への厚い思いと聖書理解への強い情熱が込められている。著者は、国際グレゴリオ聖歌学会のシュヴァイツァ現会長が紹介しているように、同学会ドイツ支部に属し、テキスト解釈の領域で研鑽を積んで来られた気鋭の研究者である。

カルデীয়ヌによる『Semiologie Gregorienne』（一九七〇）は『グレゴリオ聖歌セミオロジー』（水嶋良雄訳、一九七九）として邦訳されたが絶版のままであり、この分野に興味があっても日本語の本格的な書物が少ない状態であった。その意味で本書は、カルデীয়ヌが提唱し、アグストーニ、ヨッビヒ、ゲシュル等が意思を継ぎ、水嶋良雄が我が国に伝えたセミオロジーがこの日本において正統的に継承され、その未来が決して暗くないことを示してくれた。

ンドのアーティキュレーションによる楽曲」として鳴り響く。

第1章は、セミオロジー成立までの変遷について、過去、現在、そして未来も見据え叙述する。第2章は、セミオロジーの基礎知識がまとめてある。リズム・アーティキュレーションとネウマのアーティキュレーションの原則、旋法構成音の音楽的意味も紹介する。第3章は、融化ネウマの総合的な分析とセミオロジーによるテキスト解釈の実践である。待降節第一主日、主の降誕・夜半のミサ、死者のためのミサなど、よく知られた七曲を詳細に分析する。融化の現象が、作曲者のテキスト解釈の結果であること、しかも、

本書は膨大な資料研究と分析を駆使した最先端の研究書である。緻密な計画性と学問研究の手順、定型化された論理で標題を説明する。しかし、単なるセミオロジーの理論書ではない。読み物のように、全体に筋の通った主張が流れている。表カバーは、ザンクト・ガレン修道院に残る写本の一ページだが、貴重な写本の例示、という意味だけではなく、それは、待降節第一主日のミサ入祭唱 *Ade te levari*（詩編二五（二四）章一―三節「神よ、わたしは心をこめてあなたを仰ぐ」）であり、この曲は本書の中で異なる楽譜や歌詞分析・解釈のために一七回も引用されている。一貫した筋書き、ストーリーの主役としてページが進む毎に、気品に満ちたロンドのテーマのように登場する。そして最終的には、アウグスティヌスの聖書解釈を根底に据えたセミオロジーによるテキスト解釈の目的地、「サウ

その解釈の根底にアウグスティヌスの聖書解釈があつて、それが作曲過程に反映されていることを考察する。

講義用としても適切で、研究に欠かせない資料群が譜例、図、表、として整理されテロップのように示される。また重要な先行研究論文は、その概要が紹介される。学ぶ者にとって常にグレゴリオ聖歌が身近に感じられ、中身の濃い実践的な書である。最先端のグレゴリオ聖歌セミオロジーに基づく歌詞とネウマの関係、そして演奏上のリズム解釈に多くの示唆を与えてくれるであろう。

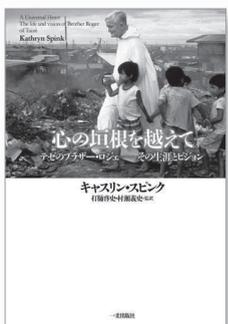
（たかはしまさみち＝日本グレゴリオ聖歌学会前会長、国際グレゴリオ聖歌学会前理事）
（A5判・一九六頁・三三〇〇円（税込）・教文館）



心の垣根を越えて

テゼのブラザー・ロジェ
—その生涯とビジョン—

打樋啓史・村瀬義史監訳



なぜ、世界中の若者が惹きつけられるのか。

「テゼ」という驚くべき出来事を可能にした人物ブラザー・ロジェの伝記。人々から最も愛されたキリスト教の指導者の一人。

A5判

定価 3,080 円【本体 2,800 円 + 税】
ISBN978-4-86325-130-4



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<https://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

多くのさざ波から生まれた 大波としてのキング

〈評者〉島田由紀



マーティン・ルーサー・キング・ジュニア
そのキリスト教と民主主義
森田美千代著



キリスト教主義学校でのキリスト教概論や聖書の時間において、キング牧師を扱う場面は多いだろう。中学や高校の英語の授業でキングの「I Have a Dream」演説の有名なくだりを暗唱した、という学生が多くおり、大学のキリスト教概論でキングの言葉や訴えの背後にあるキリスト教信仰の話を知って驚いた、という話も耳にする。同演説は、キングのカリスマにより二〇世紀アメリカを代表する名演説として一般にも知られており、現在でも傑出した知名度と説得力を保っている。

ただ、一九六三年のワシントン大行進における「I Have a Dream」演説は、キングの（暗殺により断たれた）長くはない牧師・公民権運動家としての生涯のハイライトではあるものの、彼の濃密な活動期間の一段階にしかすぎない。また、キングの存在そのものが、小ささまざまな黒人解放

運動や黒人信仰共同体での靈性形成の数多くの波のなかから生み出されたものであることは、アメリカ黒人の歴史を扱う研究者の多くが注意を促すところである。

本書は、ワシントンDCでの「I Have a Dream」演説とそれに直接連なる「アメリカの夢」をテーマとするキングの説教等に注目するが、同時に、若い牧師キングを公民権運動へと引き込んだモンゴメリー・バス・ボイコット運動、非暴力運動と強権的弾圧がテレビ映像を通じて可視化されたバーミングハムでのデモ運動、また、当局の弾圧によって流血の惨事に至り公民権法支持へ世論を喚起しつつも非暴力運動の退潮にもつながったセルマ行進といった、「I Have a Dream」演説の前と後のキングの主要な活動とその時期の思想をも丹念に跡づけている。そして、キングの生涯に通底するキリスト教信仰とキリスト教を基盤にし

たアメリカ民主主義への献身を忠実に描き出している。

さらに、本書の最初の二章ではキングと同時代を生きた二人の女性に焦点があてられる。一人は日本では比較的知られていない作家、エッセイスト、雑誌編集者のリリアン・E・スミス、もう一人はモンゴメリー・バス・ボイコット事件のきっかけとなったローザ・パークスである。本書においてたびたび指摘されているように、キングの公民権運動は相対的に男性中心に進められ、もっとも重要な局面において女性はリーダーシップから排除されていた（各地の公民権運動の草の根の広がりには、多くの女性の縁の下の活躍があったことが知られている）。扱われる二人の女性がキングの思想と活動の枠組みに直接的に大きな影響を与えたのではなくとも、人種により分断された社会の共生を目

指すキングが起こした大波が、より無名のさまざまな波と共鳴しそのうえに渦巻いていたことが、これらの二章から看取される。たとえば、スミスの人種間平等の強調（二〇世紀前半まで猛威を振るった社会的ダーウィニズムへの正面からの否定）や社会変革における教育と法律双方の重要性の主張、また、黒人の教育が等閑視されていた時代にパークスの受けた職業人としての自律と尊厳の教育と教会に根差した信仰との結びつきなどは、キングの主張にも表れると、本書は解き明かす。

「ブラック・ライヴズ・マター（BLM）」が叫ばれるいま、キングの遺産を見直す際に手に取りたい書である。

（しまだ・ゆきり 青山学院大学宗教主任・准教授
A5判・二〇六頁・二九七〇円（税込）・聖学院大学出版会



新刊

ルター研究 第17巻

特集
宗教改革と疫病

ルター研究所 編
●A5判並製 定価2,200円

〈翻訳〉

マルティン・ルター
「人は死から逃れることができるのかどうかについて」
(1527年) WA. 23, 323-386
多田 哲

ルターの
「ベスト書簡」を読む
宮本 新

「まことの礼拝」を考える
新型コロナウイルス禍の産物
立山忠浩

コロナー
人類・ルター・教会
江口再起

ルターの
「三重の秩序と立場の教え
(drei-Stände-Lehre)」と
教会の宣教
石居基夫

ISBN978-4-86376-828-4

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎03-3238-7678 FAX03-3238-7638

日本プロテスタント史に
新たな視角を提示

〈評者〉山口陽一

近代日本のキリスト者
その歴史的位相

村松 晋



近代日本のキリスト者

その歴史的位相

村松 晋著



前著『三谷隆正の研究——信仰・国家・歴史』（二〇〇一年）、『近代日本精神史の位相——キリスト教をめぐる思索と経験』（二〇一四年）に続く意欲作である。あとがきには、池田元、大濱徹也、千葉真、柳父圀近の各氏と一九九八年以来参加している無教会の集会の方、研究と「魂への配慮」にあたる同年輩の研究者たちへの謝辞があり、著者の学問と信仰の系譜を知ることができる。

村松氏は、日本プロテスタント史研究の潮流が、教会やキリスト者の戦争協力およびその天皇制や植民地支配との親和性追求にあると言ひ、あまたある「日本的基督教」の中から顧みるべき一筋の思索を探索し、近代日本のキリスト者の実像に迫ろうとする。

第一部「天皇と日本をめぐる精神史」では、まず、臣民教育を批判し続けた柏木義円の「天皇の赤子」論、聖書と

墨子から非戦・平和を主張した住谷天来の『聖化』誌廃刊に込めた抵抗に注目する。この二人は群馬の安中、伊勢崎・甘楽の日本組合基督教教会牧師で、内村鑑三の人脈にもつながる人々であり、明治的国家秩序への確かな抵抗原理を持つていた。次いで、内村鑑三の「日本の天職」論や藤井武の「遺れる者」の思想から国民的使命感を受け継いだ南原繁である。南原は国民的使命感を発揮する新たな「時」の到来として日本の敗戦と向き合った。そんな彼らの天皇と日本への哀情が探られる。

第二部『地の塩』の群像』では、稀有な足跡を遺した興味深い四人の人物が掘り起こされる。新渡戸・内村門下の川西実三は、民衆を訓化・統合の対象ではなく「主体」としようとする「社会派官僚」である。次いで、日本組合基督教教会牧師で聖ヨハネ修道所を設立し、『宗教』の発

行を続けた二瓶要蔵とその非戦・平和論が、初めて本格的に論じられている。また、住谷天来の晩年が長谷川周治の『内村鑑三先生御遺墨帖』との関連で語られる。住谷を支えた無教会の人々との「友情の交流圏」という視点はユニークである。さらに、戦後まで目配りし、「かにた婦人の村」の深津文雄の「低点志向者ジェシユアガ（イエス）」に倣う強烈な生き方が、一つの「日本的基督教」として検証される。

第三部『日本的基督教』という磁場』では、西欧神学の限界を乗り越えることを試みた三人について論究される。ここで南原繁は、生活者としての「平民」を担い手とするキリスト教を追求したとされる。これは「武士道に接ぎ木されたキリスト教」とともに内村鑑三の底流を成す「日本的基督教」のもう一つの側面であるとされる。関根正雄は、西欧キリスト教の超克をめざす学問的な「日本的基督教」から西田哲学への傾倒へと進み、関根門下の量義治は、西田の「絶対無」には超越性、他者性、人格性が欠如し、こ

れは無律法性と無責任となつて現れるとして西田を批判的に継承したという。こうして村松氏は、以上の論考から、無教会において展開された「日本的基督教」を近代日本のキリスト者の歴史的位相を指し示すものとし、日本プロテスタント史に新たな視角を提示する。

私たちは、日本と天皇に絡め取られた十五年戦争期の狂信的「日本的基督教」を徹底批判しなければならぬが、広義の「日本的基督教」は日本と日本のキリスト教にとつて不可欠のテーマであり、そこから顧慮すべき一筋の貴重な営みを抽出して育てる道筋を本書は教えてくれる。

（やまぐち・よういち＝東京基督教大学学長）

（A5判・三六六頁・四九五〇円（税込）・聖学院大学出版会）

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrikan_syoiten_0530@jehoo.co.jp	023350-0-874
仙山キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-136 靱帯センター1701F	022-223-2736	共用		fcqwk524@jbb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区龍崎2-1-1 藤ヶがしチヤペイビル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
アパコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@com.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.brighte.resp/~yokohama/ds/mes.htm	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市管所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunsha.la.cocacn.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@rmbbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacts.web.fc2.com/	ochtbok@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai_jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkithan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一丁目1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.goetsu.pneusers.107.net/~ctm	sksch@ddokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用		kbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410

※ 一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

A5判上製・482頁・定価6600円

正しい人がなぜ苦しむのか。神はなぜ悪を許容するのか。ヨブ記は人間が自由を持つがゆえの苦悩を徹底して描く。思想世界に深く切り込み、ヨブと共に苦難の意味と人間の自由を問い直す勇気が与えられる注解書。著者のヨブ記研究の集大成、ついに刊行！

並木浩一著

ヨブ記注解

■日本キリスト教団出版局

A5判・337頁・予価4950円

牧会書簡(テモテ・IIとテトス)およびフィレモン書の注解を収める。いずれも1550年前後の作品である。長老や監督などの初代教会の教職に関するカルヴァンの驚くほど自由な読み解きが興味深い。

ジャン・カルヴァン著
堀江知己訳

テモテ・テトス・フィレモン
カルヴァン新約聖書註解12

N・T・ライト著
浅野淳博訳

N・T・ライト新約聖書講解 第9巻
すべての人のためのローマ書 1

■教文館

目はかすまず、気力は失せず(仮題)

関田寛雄著

1977年のヨハネ福音書1章に関する講解説教から、1977年のキリスト教学校人権教育セミナーでのアブラハムの生涯に関する主題講演まで、40余年の間に語られた48編の講演・論説・説教を収録。著者を牧会者・説教者・神学者として生かしてきた福音の核心を余すところなく伝える。

四六判・320頁・予価2750円

INFORMATION

近刊情報

福音と世界

2021年7月号

特集 精神と権力

寄稿者＝小泉義之、松田博、渡辺翔平
辰巳一輝、松本麻里、高橋淳敏・渡邊太

書評 ヘレン・ジェファーソン・レンスキュー『オ
リンピックという名の虚構』（白井一美）／
好評連載 間隙を思考する 非同時代性のため
に（田崎英明）、霊性のエコロジー（村澤真保
呂）、I Saw a Little Prayer 開かれる世界（栗田
隆子）、新約釈義 第二テモテ書（辻学）ほか

A5判・定価660円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148
Email: sales@shinkyō-pb.com

編集室から

いものですが、少しずつ訳しています。

趣味としての翻訳は、何といつても元手がかからないのが素敵です。訳したい本を買ってしまえばそれ以上費用はかかりません。二、三行の文章を訳すのに小一時間かかるのもざらですから時間はいくらでも潰れます。勝負事ではないので負けてカリカリすることもない。そして少しずつでも進んでいるのが目に見えます。配偶者曰く「プロ野球を見に行つて、食べて飲んで負けてがっかりして帰つてく

こんな時だからこそ、外出せず

に一人でできる趣味があるといい

ですね。私は昨年の連休明けに思

い立って、英語で書かれた書籍の

翻訳を始めました。翻訳の経験と

いったら所属教会の説教通訳くら

予告

本のひろば

2021年8月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）「自分史の一瞬をとらえた本」M・
ゾンターク、（書評）増田 琴編『信仰生活ガイ
ド 信じる生き方』、佐藤 彰著『悲しみの過去
を手放し希望の未来へ』、鶴沼裕子著『逢坂元吉
郎』、キャスリン・スピנק著『心の垣根を越え
て』、小笠原優著『信仰の神秘』他

るよりずっといいんじゃない」。ごもつともです。

疲れていようが酔っていようが、とにかく一日に一度は

原書に目を通し、できれば一行でも二行でも訳す。こうす

ることで、どんな一日も全くの無駄ではなかったと思えま

す。また、翻訳に集中している時には他のことを忘れられ

ます。世の中のことをあれこれ思い悩んでくたびれるより

も、精神衛生上よさそうです。

しばらく会っていない健康麻雀の仲間が、こんなことを
言っていました。「人間には三つの場所が必要だ。行くところ、
帰るところ、そして、寄るところ」。「寄るところ」
は日常生活を離れられる行いだと考えれば、自室でやって
いる翻訳も寄るところに入りそうです。さまざまな制約を
くぐり抜けて、楽しい「寄るところ」を見つけたいもので
す。とりあえず、読書なんていかがでしょう？（白田）

苦難と自由の本質に挑む、並木旧約学の集大成、ついに刊行!

ヨブ記注解

並木浩一 NAMIKI, Koichi

正しい人がなぜ苦しむのか。神はなぜ悪を許容するのか。ヨブ記は人間が自由を持つがゆえの苦悩を徹底して描く。思想世界に深く切り込み、ヨブと共に苦難の意味と人間の自由を問い直す勇気が与えられる注解書。

◆A5判 上製・474頁・定価6,600円

購入特典

先着300名様に

『ヨブ記 並木浩一訳』冊子プレゼント!

本書に分かれて収録されている著者の翻訳テキストを、まとめて読める冊子をプレゼント。カバーについている応募マークを切り取り、はがきに貼ってご応募ください。

在庫がなくなり次第終了します。

ヨブ記注解



並木浩一

NAMIKI, Koichi

2021年6月15日刊行予定

推薦の言葉

小友 聡

東京神学大学教授、日本基督教団中村町教会牧師



いよいよ『ヨブ記注解』が刊行されます。日本を代表する旧約聖書学者である並木浩一先生が、半世紀に及ぶ「ヨブ記」研究の頂点として執筆した、本格的な注解書です。本書はヨブ記の意味と意図について、最新にして最高の見解を提示します。日本語で書き下ろされた本格的なヨブ記注解を読めるのは大きな喜びです。長く読みつがれる最良の注解書になるでしょう。

好評発売中

並木浩一著作集 全3巻 各巻 A5判・350頁

1 ヨブ記の全体像

オンデマンド並製・定価4,950円

旧約聖書の白眉、ヨブ記の読み方を展開して読者の理解を深める。

2 批評としての旧約学

上製・定価4,400円

聖書の世界を担う人間と社会に向けて、想像力を馳せる批評的エッセー。

3 旧約聖書の水脈

上製・定価4,400円

伝統の源流、預言者による展開を追い、旧約の豊かな人間感覚を味わう。



1巻
2021年6月
オンデマンド
復刊!

聖書に聴く「人生の苦難と希望」

船本弘毅 著



混乱した現代社会を、苦難の襲う人生を、共に
 真実の希望を仰いで生きていこう。晩年に自ら
 病を得た著者が最後にあなたに届ける、聖書の
 み言葉の贈り物。日本キリスト教文化協会連続
 講演会で語られた、旧約から4回、新約から5
 回の聖書講話を収録。

● 四六判・並製・220頁・定価1,980円

ゴシック芸術に学ぶ現代の生きかた

N・ペヴスナーとA・W・N・ピュージンの共通視点に立つて

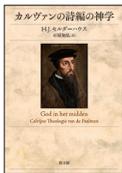


近藤存志 著

20世紀を代表する美術史家ペヴスナーと、ゴシック・リヴァイヴァルを主導した19世紀の建築家ピュージン。中世ゴシック芸術の名もなき職人たちの謙遜を称揚する2人の言葉から、神律の社会から乖離した現代における生のあるべき姿を考える。

● A5判・並製・150頁・定価1,320円

詩編は
 魂のすべての
 感情の解剖図！



カルヴァンの詩編の神学

H・J・セルダーハウス 著 石原知弘 訳

詩編作者ダビデの中に自分自身を見出し、慰めと励ましを得ていたカルヴァン。彼の魂の遍歴と神学の全貌を『詩編注解』から読み解いた比類なき研究。

● A5・上製・416頁・定価5,060円

加藤常昭説教全集33 コリントの信徒への手紙二講話

第IV期第6回配本

加藤常昭 著



使徒パウロが「慰めの共同体」として
 教会を建て上げるために国際都市で
 あったコリントの教会に書き送った第
 二コリント書。FEBICで語った聖書
 講話の待望の書籍化。

● 四六判・上製・448頁・定価4,180円

「加藤常昭説教全集」第IV期(全7巻)

【既刊のご案内】

- 第31巻 使徒言行録講話 (定価4,290円)
 - 第32巻 コリントの信徒への手紙二講話 (定価4,290円)
 - 第34巻 エフェソの信徒への手紙 (定価2,970円)
 - 第35巻 新約聖書書簡の説教1 (定価4,070円)
 - 第36巻 新約聖書書簡の説教2 (定価3,630円)
- 【続刊のご案内】(2か月1冊刊行予定)
- 第37巻 旧約聖書・福音書の説教 (8月刊行予定)

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
 電話 03-3561-5549 (出版部直通) 〔呈 図書目録〕

キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は(e-shop 教文館)
<http://shop-kyobunkwan.com/> まで！



一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
 二〇二二年七月一日発行 毎月一回一日発行
 本のひろば 第七六三号 二〇二二年七月号

発行所 〒163-8614 東京都新宿区新小川町九一-1 一般財団法人キリスト教文書センター
 電話03-3360-1652 振替0017-0151-1679
 発行人 金子和人 編集人 白田浩一 印刷所 モリモト印刷
 発売所 日本キリスト教書販株式会社 電話03-3360-1670

定価七八円(税抜七二円) 〔〒71円〕
 二年分一三〇〇円(送料共)